

PENGUIN

コーヒーの香りが、アスランの鼻孔を擦る。

周りの兵士たちが飲む飲料缶から漂うその香りと、和やかな談笑を聞いていると、ここがまるで街中の喫茶店のように思えてくるのだから不思議なものだ。実際は街どころか陸地からも遠く離れた、海の上を走る船の上だというのに。

船——ミネルバは今、ジブラルタル基地への道を辿っていた。シンの活躍により、アークエンジェルという大きな障害を乗り越えたせいなのか、艦内はどこか浮き足立っていて、談話室に集まった兵士たちの声にも明るい笑い声が目立つ。

アスラン自身は、そのアークエンジェルのことを思えばとても笑えるような心境ではなかったが、それでも共に戦う人々が楽しげにしているのを厭う程ではない。自分は少し離れた席へと身を寄せながら、ぼんやりと視線を宙に投げかけていたところ、突如わつ、と中央の一団から歓声が上がるのが聞こえた。

「見た、今の！」

「あんなに速いのか」

話題の中心になっっているのは、中央に置かれたモニタに映し出される映像のようだった。

なにか新型の兵器でも公開されたのかと、アスランもまた、興味半分、仕事気分半分で腰を上げる。それに気付いた幾人かがモニタ前の席を譲ろうとするのを辞退しつつ、同じように集まった兵士らと共に、画面へと視線を流せば、そこには想定外のもので映っていた。

画面の中には、まるで今の自分達のように何かに群がる人々。そしてその視線の先にあつたのは、澄んだ水の中をしなやかに泳ぐ、複数のペンギンの姿だった。「泳ぐのは早いって、本当なんだなあ」

なんだ、と、拍子抜けするアスランとは裏腹に、少年兵の幾人かは、感嘆の声を漏らしながら画面に釘付けになっているようだ。

どうやらモニタに写っているのはただの現地ニュースで、この付近に出来たばかりだという動物園の取材映像が紹介されているらしい。そして、その中でも一番の売りである水中ショーのコーナーが先程から流れているようだった。

考えてみれば、ここにいる兵士達は、宇宙育ちのコーディネーターがほとんどだ。こうした地上でなら珍しくないような施設も、資源に制限のある宇宙では、なかなか見ることは出来ない。

そのため、こうして動物園の紹介が流れること自体が新鮮なのだろう。そう思うと、目の前の彼らの反応も理解できる。

ペンギンたちの泳ぐ深い水槽は、上から太陽光が入るようになっているのか、その壁一面に水面の影を映し出す。そして、その影を遊び相手にするように、二羽、三羽と入り乱れながら泳ぐペンギン達。

まるでロケットのように、勢い良く水中を飛び回る白と黒の姿には、確かに見るものを虜にするだけの迫力があつた。

そして、水中を乱反射する光がその姿を彩り、幻想的な画面が人々の目を楽しませる。おそらくその効果も計算され尽くしたものなのだろう。凝った建設的なと感心するアスランをよそに、カメラは地上へと移り、今度は岩山でのペンギンたちの姿を映し出した。

水中とは違ってかわって、のんびりと愛らしくくつろぐ姿に、今度は女性陣が歓声を上げた。次々と映し出される映像に、その都度可愛い可愛いと黄色い声を

談話室に響かせる。

そのかしましさに苦笑し、ふと視線を上げれば、小さな影がひとつ、その輪から抜け出して部屋を後にするのが見えた。

「シン？」

見間違えるはずもない、その姿。

しかし、歓声にかき消されて、アスランの呼び止める声もその背中には届かなかつたのか、シンは振り返らずに廊下へと消えてしまう。

まるで何かから逃げるかのように立ち去る足音に、それをそのまま見過ごしてはいけない気がして、アスランは急いでその後ろを追った。

廊下を抜けた先にある甲板に、シンはいた。

空は高く晴れ渡っていたけれども、海上の空気は湿気をはらんで冷たく、それに耐えるかのように少し肩を凍めている。その仕草と相まって、足元から吹き上げる風が長めの裾をばたばたと揺らしているのがまるで尻尾のようで、先ほど見たばかりの地上のペンギンみたいだな、とアスランは独りごちた。

そんなアスランの思惑に気付くわけもないが、足音でアスランが自分を追ってきたことにはわかっていたのだろう。手をかけていた柵を背に寄りかかる姿勢へと変えて、シンは呆れた声でアスランに呼びかけた。

「テレビ、見てたんじゃなかったんですか」

「ペンギンよりお前が抜けていく方が気になったんだ、仕方ないだろ」

「……別に、頼んでませんけどね」

冷たく突き放す言葉とは裏腹に、その口調はおどけ

てアスランをからかうものだ。強い潮風に吹かれて目を細めながらも、こちらを見る彼の視線も暖かい。

それは、ここ最近出来ずにいた軽い言葉のやりとりで、それだけでアスランの心をも暖かくする。

——シンがフリーダムを撃墜し、その直後、感情に任せて彼を殴りつけたのはつい最近の話だ。

そして、それ以前から何かとすれ違うことが多くなってしまうっていた彼と、こうしてまともに会話すること自体が久しぶりなのだとということに気付く。

船内ならぎくしゃくしてしまう空気も、今ならそのまま宙へと逃がすことが出来そうで、シンの寄りかかる柵へと自分も身を任せれば、真紅の瞳が何うようにこちらを見た。

普段はあんなにも強気なのに、こうして二人きりになると少しだけ見せる弱気の影響。それがシンなりの不器用な甘えの表現なのだと思いついたのは、いつだっただろうか。

……そして、それを愛しく思い、いつしか彼自身を愛しく思うようになってから、どれだけの時間が過ぎたのだろう。

けれど、せわしなく流れる日々に流されて、アスラ

ンからその想いを言葉にしたことはなかった。それでもその感情は何かしろ相手に伝わるものだったのか、想いを自覚してからのやりとりは、以前よりも少し柔らかく、そしてかすかな熱を持つものになった、と感じていた。

そして、シンからもまた、ただの同僚とは違う特別な感情を寄せられていることにも気付いてはいたけれども、それもまた、シンから明確な言葉として示されたことはなく。

互いに互いの感情に気付きながらも、それは関係を変えらるほどの熱にはなれず、ただ熱は熱のまま、今も冷めることなく胸の内に燻っている。きつとそれは、シンの側でも同じなのだろう。

隣に立ったまま何も言わないアスランに、シンが戸惑っているのがわかる。口唇が物言いたげに一瞬震えたのに、衝動的に自分のそれを重ねたくなったのを堪えて、代わりにアスランは、潮風に乱されたシンの髪を撫でて、軽く整えてやった。

「……慰めようと思って、きたんです？」

そういうつもりはなかったが、それを慰めか、あるいは子供扱いと取ったのだろう。不愉快だとはつきり

表情にでているのが、逆に本当はそれを求めているのだと白状したようなものだ。頭を振ってアスランの手から逃れようとするのを逆に引き寄せ、わざと視線をずらすように身を寄せてやれば、一瞬躊躇った後、シンは素直にアスランに身体を任せた。そして、冷たい空気の中、ただ黙って互いの体温を感じていると、それに促されたように、シンがゆつくりと唇を開いた。

「……妹が、動物園とか好きで」

「ああ」

「オーブにもあったから、家族で行ったことがあったの思い出したんです」

風に紛れて消えてしまいうるような声で、シンがつぶやく。交わらない視線の先には、きつと在りし日の家族の姿が浮かんでいるのだろう。アスランにそれを見ることは出来ないけれど、ただ黙ってシンの話に耳を傾ければ、その記憶を分かち合わせてくれるかのように、少しずつ、シンはその時の様子を語ってくれた。

行った動物園は、決して大きくなかったか。それでも妹は喜んで動物を見て回り、特にペンギンが気に入っていたこと、けれど、小さい動物園では、あんなふうに泳いでる所は、見たことはなかったことなど。

「だから、妹に見せてやりたかったな、つて……」

最後に呟かれた言葉には、相槌を打ってやることすら、できなかつたけれど。

「アスランさんは、本物見たことあります？」

「……ずいぶん昔になら、一度だけ」

それこそあれは、アスランがシンの妹くらの年の頃だったろうか。忙しい父はいなかつたけれど、母と二人、やはり小さな水族館へと連れて行ってもらった記憶がある。

もちろんそこでも彼らが泳ぐ姿などは見られず、人のあふれる園内の中庭にあった檻の中、冰山を模して不自然に白く塗りつぶされた山の上でただぼんやりと空を見ていた姿だけが、アスランの脳裏に浮かび上がった。

当時の自分にはわからなかつたけれど、あのペンギンも、本当はあいつた水の中ならば自在に泳ぐことができたのだろう。それが本来の姿だと見せられた今となつては、人工の風景に閉じ込められた記憶の中の姿に、物悲しささえ感じる。

目の前に空は開けていても、そこを飛んで逃げる翼はなく、ただ一生見世物としてあの檻の中で過ごすべ

ンギン。

もつともそれは、先ほどの番組に写っていたペンギンだつて同じ事なのだけれども。

「本物の、本物が見てみたいな」

不意に、シンが姿勢を変え、アスランの顔を覗き込んだ。謎かけのような言葉に、いたずらを思いついた子供の目が光っている。

「連れてつてくださいよ」

「……さっきの動物園か？」

珍しい彼の誘いに、思わず基地についてからの自分たちの予定を脳内で辿る。しかし、考えこむアスランに向かつてシンが言ったのは、そうではなかつた。

「そうじゃなくて、本物。北極？ 南極？」

どこにあるかも知りませんが、と続けてから、啞然とするアスランを横目に更にシンは言葉をつなぐ。

「きつとアンタの次の機体もそろそろ搬入されるだろう、そしたらそのままそれに乗っていけばいいじゃないですか。いっぱい食料抱えてさ、そして水中に潜つて目の前で泳ぐところ見てさあ」

「お前なあ……」

冗談だとわかかっていても、軍人としてあまりにも聞

き捨てならない発言に、呆れるべきなのか、それとも流石に怒るべきなのかと悩んでいると、すぐにシンは紅い瞳を逸らしてしまう。

そしてそのままアスランの腕をすり抜けると、代わりに一つ、二つと離れた柵へと寄りかかりながら、けらけらと笑ってアスランに呼びかけた。

「逆でもいいですよ！ オレがインパルスに乗ってき、アンタを連れて南極まで連れて行ってあげますよ！」

彼女——ステラの時のようにか、と出掛かった言葉を飲み込んで、アスランはシンを見つめ返した。

しかし、背中からシンを照らす太陽の光に邪魔されて、アスランからその表情を伺うことはできない。水面に反射する光の作る影だけが足元をたゆたって、まるでそこにも海があるように二人を隔てている。

ほんの一步、二歩と踏み出せば飛び越えられる小さな海。けれど、その深さを泳ぐための翼を自分は持っていない気がして、アスランはその場でただ立ちすくんだ。

海の向こうでは、シンがまたひとつ、奥の柵へと身を滑らせてその距離を離す。風に煽られながらも身軽に甲板を歩く姿は、まるで飛ぶようで、泳ぐようで。

きつとそんな彼ならば、南極にいるペンギンたちの横も似合うだろうと、想像してみたことに、少しだけアスランの口元が緩んだ。

そこでなら、誰にも邪魔されず、戦いのことも、キラたちのことも、なにも余計なことを考えずに、ただ彼と二人で穏やかな時間を過ごせるのだろうか。

「悪くないな」

「え？」

「悪くないって、言ったんだ」

波の音に消されぬよう、大声で返せば、想定外の返事だったのか、そちらも大声でシンが笑うのが聞こえた。

「じゃあ、一緒に見に行きましょうよ！ 約束しましたからね！」

それが誰にも許されないことを知っているからこそ、の、甘美な誘い。お互いに破られるのを分かっている約束。

——実際は、そうして逃げた先になど、安らぎはないと知っているけれど。

「ああ、約束だ」

なにもかもに縛られて、どこにもいけないままの自

分が、彼と一緒に逃げる事ができればどれだけいいかと、そう思った気持ちに嘘はなかったのだ。

足元に打ち寄せる波が、遠いあの日の波音を呼び覚ます。砂浜に寄せては返す波をぼんやりと見つめながら、アスランはただ、隣に立つシンがなにか言い出すのを待っていた。

離れていたのはたった数ヶ月のことだというのに、その間に随分と雰囲気が変わったと思う。それは、戦いが終わったからなのか、それともレイという大切な仲間を喪ったせいなのか、あるいはその両方か。

議長之死を以って停戦となった戦争の後、こうしてシンと会うのは初めてだった。

アスランも、メイリンさんもザフトの方に会いたいでしよう、キラとミラクスの計らいによって設けられた席を抜け、オーブの慰霊碑を背に、もうこうして何分も二人、波打ち際で黙り込んでいる。

逃げたことを、謝ればいいのか。

逃げたことを、責めればいいのか。

互いに抱えたわだかまりが大きすぎて、なにか言葉にすることもできず、ただ波音だけが何度も二人の間を通り過ぎていく。既に夕暮れに近づいた空が茜色に海を染めて、すこし冷え込んできた空気にシンが小さく身動きをした。

「寒くないんですか、アンタ」

「あ、ああ……」

いつもの彼の口調に、アスランもようやく重い口を開く。こうして話していると、まるであれから時間が経っていないかのようにだけれど、もう彼の紅の瞳は、あの頃のように真つ直ぐにアスランの瞳を見ようとはしない。ただ、隣に立ったまま、同じ海を見つめていくだけだ。

それにどんなに胸が傷んでも、あの嵐の日の選択をやり直すことはできない。いや、もし戻れたとしても、結局議長への信頼を失った自分は、その元にいることはできず、遠からずザフトを飛び出したのだろう。

ただ、そのことをシンに伝えられていたのなら。議長の考えはおかしいと、その歪んだ思想に囚われたザフトの姿を説明することができたならば——逃げろ自分の横にいたのは、メイリンではなくシンだったのか

もしれないと、益体もない想像にアスランは苦く口元を歪めた。

——そのまま逃げたとしても、南極でずっと、二人でいられるわけでもないのに。

「アスランさん」

「なんだ？」

「南極、一緒に行くって約束したの、覚えてますか」
不意に、まるでアスランの心を読んだかのように、シンが呟く。

「……ああ」

「オレ、アンタがいなくなつてから、ステラのこととか、アークエンジェルの人らのこととか、議長が言うことも、レイのことも何度も考えたんです。けど、その時に最後に思い浮かぶのは、決まってアンタとした約束の事だった」

「……………」

「考えて、考えて、考えるのが嫌になつて……何もかも投げ捨てて、ただいたい人とだけ一緒にいられたら、つて。……けど」

言葉を止め、諦めをにじませた響きで、シンがひとつため息をついた。それは潮風に拐われて、冷えた大

気に溶けていく。まるでその温度とともに、彼の熱を冷ましてしまうかのように。

「本当に一緒に逃げたらどうなるんだろうなって、何度も考えても、でもその先のこと、オレには思い浮かばなかつたんですよ」

それは、アスランに伝えようとしていると言ふよりは、自分自身に言い聞かせるためのような言葉だった。「どうしてなんでしょうね……どうして、オレはオレと一緒にいたい人と一緒にいることが、こんなに難しいんだろう」

シンの手をすり抜けていった、たくさんの人々。その中にはきつと、あの嵐の夜の自分も含まれているのだろう。

そして、一度離れた手をもう一度取ることは許されないのだと、言外につきつけられた気がして。

「……………」

許さないのは、誰なのだろうか。

互いの環境も、時の流れも、そして、なにより自身自身がそれを許さないのだと、気付いていても口には出せないままに、アスランはただ、シンの言葉を待つ。

「だから、あの約束は、もう忘れます」

シンが告げる、最後の言葉。

「あの約束を抱えたままだと、オレはきつといつまでもそのことを考えて、どこにもいけない」

逃げることも、立ち止まることも、今の自分には許されないから、と。

決別を選んだ彼に、忘れないでくれとは、言えなかった。

「……わかった」

アスランが自分自身を許せないように、シンもまた自分自身を許すことを知らないのかもしれない。それでもただ、前に進むことは諦めずにいるその強さに、あの日見たペンギンの姿が思い浮かんだ。

冷たい水の中、重力というしがらみを脱ぎ捨ててしなやかに、力強く泳ぐ姿。

自分との約束が、白い幻想で彩られたあの偽物の冰山だというならば、シンが選んだ厳しくも広い現実には、彼がその能力を十分に發揮するための、大きな海になるのだろうか。

そして、それがどれだけ彼のためになることなのだろうと思えば、あの日に二人で逃げ出さなかったことは正しかったのだと、思える気がした。

水平線に、太陽が沈む。

消える前の最後の輝きが、海と陸の境を赤く染め上げるのが、まるでその二つを切り離すラインのようだった。

日が暮れて、ラインがそこから消えてしまっても、もう海と陸は交わらない。彼は彼の海へと向かう事を決めたのならば、自分もまた、同じように向かわなくてはいけない場所を探すべきなのだろう。

最後の温もりも太陽と一緒に連れ去ったのか、一際冷たい塩風が、追いついてるようにこちらへと吹きつける。それにくると背を向けて、シンが強く砂を蹴って、海岸線を駆け上った。そして。

「ねえ、アスランさん」

随分離れてしまった場所から、シンがこちらを見ていた。夕闇に阻まれて、もうアスランからその表情を伺うことはできない。けれど。

「あの時少しでも、本気で一緒に逃げようって思ってたかったですか？」

そう問うシンの声は、震えていた。

今すぐ追いかけて、その手を掴み取れば、約束は戻るのだろうか。しかし、アスランはそこから動くこと

ができなかった。

返事を待ってうつむく姿も、涙をこらえて震える声も、全て、全て、今でもこんなに愛しいと思っっているのに。

けれど、その弱さを愛しく思うのと同じくらい、歩き出すことを選んだシンの強さを愛しくも思うから。

「……思ってたよ」

ただ、餞の言葉として、その返事を送る。

たとえ、その先になにもないと知っていても。お互いがお互いを求めていた気持ちだけは本当なのだとして、「今でも思ってる」、そう叫びたい心を、その裏に隠して。

「……オレもですよ」

アスランの声に、シンもまた、答えを返す。その言葉に自分が微笑んだのが、シンからは見えただろうか。

それを確認する事もできないまま、シンは去っていく。

「好きだったんだ、本当に」

その後姿をに向かつてつぶやいた告白は、波音にかき消されてアスラン自身の耳にも届かないまま、消えていった。

私にとってアスシンは、原作重視で考えると、お互い好き合ってもまず幸せになれないカブだと思ってるのです。

というか、両思いだと知っていても、ふたりとも「自分は幸せになってはいけない」と戒めているところがあり、またそれを望む前に「自分は残される側だ」諦めているという印象。そうやって自分自身の未来に期待するのをやめたというか。

(世界に期待するのをやめた訳じゃなくて、あくまで自分個人の未来とかそういう話ね。んでその分他の人には幸せになってほしいなあとか思ってそうだ、特にアスラン)

アスランは父親のことを筆頭に、他にも自分にはいくつもの罪があると自認していて、そんな自分が幸せになることなんて許されるはずがないと。そしてそうやって両親に先立たれて、かつ種デス時にキララクにも(結果的に)置いていかれて、なんか自分は取り残される側だなんて漠然と感じてるんじゃないかなと。

シンはシンで、マユ、ステラ、レイと大切な人を喪って、自分だけ幸せになれるなんて思っなくて、やっぱり自分は取り残される側なんだってどこかで思ってた。

そしてそんな二人がお互いにお互いを大切に思っていたとしても、じゃあ仲良くしあわせになろうか！ ってなるとは思えないのよなあ…。

本編の流れ的に、最終回後の周りの環境もそれを許さないだろうしね。

まあそんな幸せに後ろ向きな人たちがでもアンタとだけはしあわせになりたいんですよおおおおお！！って種バーンするのを妄想するのが同人の醍醐味だとは思いますが、まあ今回はその手前の話ということで！

とりあえず読んで「ああこの歌でそうやって妄想してたの…」と生温くご理解いただければと思いますー。ていうか原曲おすすめなので聴いてね！以上！！

身内以外はほとんどの方が初めましてかと思いますが、藤井咲と申します。普段はASTRAYの方で活動しているのですが、今回なんと初のアスシン本です。

SEED DESTINY リマスタおめでと一&SEED IMPACT こんどこそファイナル！ということで、ここ
で出さなきゃもう出す機会もないだろうな…と思って書いてみました。

好きなカップリングなのですが、ゲストや落書き程度でしか書いたことがないので
あんまり自分がアスシン好きだと周りに認識されてないというか、その周りが濃すぎるので目
立ちようがないというか…。いや別に目立たなくていいんだけど！w
まあそんな感じで普段はあまり語る機会もないアスシンですが、折角なので拙い作品共々ちょ
いと語ってみようと思います。よろしければお付き合いくださいませ。

まず作品についてですが、タイトルにした曲まんまの話です。

槇原敬之氏の「PENGUIN」という曲（アルバム「UNDERWEAR」に入ってます）なのですが、私的
にめっちゃアスシンソングなのですよー！！

…と、訴えつつカラオケで歌っても大概「…??」という反応をされるので、ええいこの辺が
アスシンなんじゃああああああと書いてみた、それだけの話ですw

詳しくは全部の歌詞を見ていただければわかるのですが、これ、過去にお付き合いしてた二人
が何らかの事情で反対されて別れて、でも付き合っていた過去を悔やむでもなく、肯定してい
る曲なんだと思うんですね。（勿論人によって解釈は違うでしょうが）

んでその肯定の仕方が凄く淡々としているのが、逆に戻れなさを強調するという。

PENGUIN

2013. 1. 10

眠れない夜空 藤井咲

<http://night.littlestar.jp>

Lyrics by Noriyuki Makihara 「PENGUIN」

<http://www.utamap.com/viewkasi.php?surI=B08294>